

生涯の日を正しく数えるように

今朝の詩篇は、キリスト教会では、葬儀のときに用いられることの多いものです。しかし、わたしはあまりこの詩篇を使った記憶がありません。理由は簡単で、キリスト教の信仰を得ていない人も多く参列する葬儀の場で、7節以下ですが、わたしたちの命が、神の怒りによって取り去られるという表現、神の怒りのもとにあるわたしたちの人生という聖書の理解につまづく人がいることが予想され、「あなたを畏れ敬うにつれ、あなたの憤りをも知るでしょう。生涯の日を正しく数えることを教えてください。知恵ある心を得ることができるようになりますように」という聖句を解き明かしたいと思いつつ、時間的制約と葬儀の目的から遠慮することが多かったのです。しかし、教会の礼拝では、この詩の持つ背景も含めて、この詩の告げることの意味を深く掘り下げて、励ましを得たいと願っています。

「生涯の日を正しく数えることを教えてください。知恵ある心を得ることができるようになりますように」という呼びかけは、わたしたちを立ち帰らせて下さいという真実な願いです。週報にも少し書いたのですが、この詩篇 90 の作者はモーセとされ、全部で5巻に分けられる詩 150 篇のうち、第4巻の巻頭、オープニングにおかれたものです。まずここにモーセが登場することに大きな意味があります。詩篇の第三巻は73篇から始まりますがほぼ全体が嘆きの詩篇であり、そのクライマックスが89篇に記される神によるイスラエル民族の拒絶、ダビデ王に誓われたあなたの王朝を守り、永続させるという契約の破棄でした。それはすべてイスラエルが神の御心に背いて行動したということの結果であり、そのことを彼らも重々承知している。89篇の最後は「主よ、真実を持ってダビデに誓われたあなたの始めからの

慈しみはどこへ行ってしまったのでしょうか。主よ、御心に留めてください。あなたの下僕が辱めを受けていることを」と嘆き、訴えかけるのです。怒って御前からイスラエルを斥け、異民族の手に委ねたその神以外に、彼らは神を知らないのです。この神はご利益がない、別の神を探そうという考えはない。それゆえにモーセなのです。ファラオの圧政下にあったイスラエルをエジプトから導き出し、シナイ山で律法を頂き、神の民として誕生したその時代へ、王も、国家もなく、神殿もなく、荒れ野をさまよった時代に立ち返り、そこから彼らは告白する。感謝をもってこう告白する「主よ、あなたは世々にわたしたちの宿るところ、山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から 世々としえに、あなたは神」。創造主としての神を思い起こすこと、ふたたび初めの恵みに立ち返って始めること以外に、自分たちの救いはないことを民族のどん底のなかで心に刻んでいる。そこにこの詩篇の力があります。そこからリセットを願っているのです。「主よ、あなたは世々にわたしたちの宿るところ」だからです。この「宿るところ」をそのまま「住まい」として、「主よ、あなたは住居となってくださいました。世々、われらのために」と訳した人もいます。これは本当に特別なことで、わたしたちの神は住所を持ちません。八ヶ岳連峰にお住まいであるとか、伊勢におわしますとか、カスピ海にといった特定の場所との結びつきをもたないのです。なぜなら「山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から 世々としえに神」である方、すべてをお造りになった方が、造られたもののなかに、わざわざ住まうことはない。けれども驚くべきことに、神は逆に、人間の住まいとしてわたしたちに御自分を示されているというのです。聖書は、わたしたち人間との交わりを望んで神が人を創造されたと伝えて

います。人間はそのような特別な被造物として、「神のかたち」として造られました。その本質は神に応答して生きる能力を与えられていることです。それゆえ、産めよ、増えよ、地に満ちよ、地に満ちて、地を従わせよ、と祝福されたのです。ところが、わたしたち人間は、この神の願いに背き、動物には与えられなかった神のかたちという特別な能力、理性でもって自由に判断し、行動を決定できるという能力を、「神のように」なろうとして用いました。これがただひとつ禁じられていた園の中央にあった善悪の知識の実を食べるという行いとなり、その結果、人の目が開け、互いに裸であることを知り、アダムとその妻は互いの体を隠し、神の視線からも隠れる存在となりました。まずいことをしたという自覚はあったわけです。「生涯の日々を正しく数えることを教えて下さい。知恵ある心を得ることが出来ますように」と、わたしたちが願い、祈らなければならない理由、「われらを試みにあわせず、悪より救い出し給え」と祈らなければならない理由はここにあります。お言葉によってすべてを創造された神の命令に背くことは、人間の生きる領域にふたたび混沌を招き入れるのです。神の言葉によってこの世界は秩序づけられたのに、わたしたちは神の言葉に従うのではなく、それぞれ自分の正しいことに生き始めたからです。光の与え手、秩序の与え手、創造主である神に背を向けた結果、人間は闇に向かい、無秩序と混沌に突き進み、たがいに自分の小さな正しさを裁き合うものとなりました。アダムは妻を責めましたし、妻は蛇が悪いのだと言う。あなたがわたしのところに女を連れてこなければこんなことにはならなかったと情けないことをアダムは口にする始末です。つづく4章では嫉妬と競争心で兄が弟を殺します。動物は仲間を殺せないのに、「神のかたち」を与えられた人間にはそれができるのです。それだけ大きな自由を

神さまはわたしたちに下さったのに、まさに宝の持ち腐れです。神から所在と行為の責任を問われる被造物は人間だけです。

「どこにいるのか」「なんということをしたのか」という人間への問いかけは、創世記に始まり、ヨハネの黙示録まで、この世界に神が終わりを告げ、完成される時まで消えることはない。それがこの詩篇 90 篇の背景にあることです。神はすべてを創造された方である。しかも、神はご自身の選ばれた人間の住居となられる方として、ご自身を定めてくださっている。場所にはではなく、人の住居として、シェルターとして、まことの家として、わたしたちと共に歴史を歩んでくださる。この喜び、盤石の安心感をきちんと味わうことがこの詩の命です。そして、わたしたちが罪に落ちた時、立ち返る先も、わたしたちの住まいとなってくださる神の下であることをイスラエルは思い起こしているのです。それが可能なのは、「どこにいるのか」「なんということをしたのか」と、神に背を向ける人間を探し求める創造主の呼びかけがある。こうした関係を踏まえないと、7 節以下の「あなたの怒りにわたしたちは絶え入り、あなたの憤りに恐れます。あなたはわたしたちの罪を御前に、隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。わたしたちの生涯は御怒りに消え去り、人生はため息のように消え失せます」という罪の理解が掴めません。わたしたちの国は美しい自然に囲まれていますので山川草木すべてに魂が宿るといった世界観、八百万の神々という理解が不思議ではない、神道は教典をもたない自然宗教です。自然に身を委ねてゆく感性は育っても、それらすべてを創造された方としての主に思いを馳せることは難しい。しかし、わたしたちは、人間の営み、日々の振る舞い、関わりの中で自分の位置づけをし、自己査定を繰り返しながら生きていますから、なしたこと、なさなかつたこと、責任の取れること、取れない

こと、理解できること、理解できないこと、詩人が適切に述べているように、自分では認識できない「隠れた罪」こそがわたしたちの問題であり、わたしを造られた方の前に、自分がどのように応答し、隣人として与えられた人々にどう応えて生きているかが問われていると感じている。ここが神の求める正しい応答に至っていないからこそ、11節「み怒りの力を誰が知りえましょうか。あなたを畏れ敬うにつれ、あなたの憤りをも知るでしょう。生涯の日を正しく数えることを教えてください。知恵ある心を得ることが出来ますように」と願うのです。この表現は心を打つ率直さですが、同時にキリスト・イエスによる罪の赦しの与えられていない段階ゆえに、こう告白することが限界でもありました。赦されなければ自分の罪を認めることは出来ない。十字架に御子が釘付けにされたことは罪あるわたしの身代わりであったことを知らされているからこそ、赦された者として、十字架というかたちでわたしたちの罪の重さを、神の憤りの深さを知ることができるのです。自分の力や、認識で、わたしたちは自分の罪を測ることは出来ません。またそういうかたちで自分を追い詰めるのも間違いです。それは自分を傷つけるだけで、しかも自分の罪を必ず片目をつぶって見ているような不完全なものにしかならないからです。わたしたちは自分の罪をキリストの十字架以外のところで見てはならないのです。この詩の素晴らしさは「人の子よ、帰れ」（3節）という神の呼びかけに、詩人も神に向かって「主よ、帰ってきてください」と言い返していることです。13節以下の展開ですが、これは驚きですね。「人の子よ、帰れ」というのは、この詩篇においては死を意味するだけではありません。肉体の消滅や自我の消滅としてしか死を捉えられないわたしたちに対して、神さまはご自身の交わりのうちに帰ってくるように求めておられるのです。

世々としえに神である方に帰ることが求められる交わりの中で、人間の側も「神さま、帰ってきて下さい」「いつまでわたしたちを放って置かれるのですか」と相手の裾をつかむような物言いをする。この特殊な関係こそが、契約という特別な取り決めのなかにある神と民族の姿でしょう。あなたは世々にわたしたちの宿るところなのですから、住居となってくださると約束してくださって、先祖たちはそのように生きてきたのですから、わたしたちもそのようにしてください。そう願う。神とイスラエルの契約を愛という言葉で表現した預言者がいます。まさにそのレベルの訴えかけです。主よ、帰ってきてください。あなたの僕らを力づけてください。わたしたちに喜びを返して下さい。あなたの御業を仰ぐことが出来るようにしてください。わたしたちの手の業をどうか確かなものとしてください、次々と願い求めがあふれ出てきます。わたしたちには力がない。認識する力も、立ち返る力も、だから神の愛にすぎるのです。神が御顔を向け、わたしたちの主として立ち上がってくださることをひたすら願い続ける。そうした信仰の営みが粘り強い祈りとなり、希望となり、励ましとなることをこの詩篇は教えてくれます。わたしたちの正しい生涯の日々の数え方は、自分を出発点とすることではなく、神を出発点とすることだとこの詩篇はわたしたちに告げているのです。ここに慰めがあります。

主よ、帰ってきてください、わたしたちを立ち帰らせて下さい。

お祈りいたします。